英語。

音無　無音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英語。

【Ｎコード】
Ｎ５４９８Ｓ

【作者名】
音無　無音

【あらすじ】
私は、英語が好き。　最も、昔は嫌いだった。　あの、森先生のおかげで――――。　■元々はＮ●Ｔのテストであった英文参照！　漫画にしようと思ったけど、気力ない。

（前書き）

テストの時間内って問題わかんないとだるいよね

Ｉ　ｌｉｋｅ　Ｅｎｇｌｉｓｈ．
私は、英語が好き。
それは全て、森先生のおかげ。

■　■

「晴子ぉ、英語だるくねー？」
「だるいよ、だるい、めちゃだるい！去年点数悪かったしね」
「マジ？あたしもー」
「でもさ、先生変わるんだったよねッッ」
たしかにねー、と相槌を打つ。
ざわつく教室。
「えー、じゃあ、担任の先生の発表です」

――うちのクラスは、新任の先生がもつらしい。
結構若かったな。
新採用って言ってたな、そういえば。

「えーっと、このクラスを持つことになった森です」
「ヒュゥ！先生イケメーン！」「よっ！色男！」
などと騒ぐ男子。

「うっし、じゃあ、自己紹介も終わったし。
みんな、机下げて」

「？」
「一時間目はゲーム形式の英語だ」
一気にテンションが高まるクラスメイト。
――この授業だったら楽しめそう。
ふと、晴子はそう思った。

「森先生！」
「あ、君は道施さん。」
――名前覚えててくれたんだ・・・・
「晴子でいいですよう！この問題なんですけど――」
「い・・・・、いや、呼べないよ。ああ、ここはね」
晴子は、森先生に教えてもらうのも楽しかった。

「道施さん」
「はーい」
振り向くと森先生。
何処と無く切ない顔だった。
「・・・・・・・・・・・・・・・・？」
「・・・・・・・・・・、ごめん、呼んだだけ」
「？」
先生はそう言って職員室に帰っていった。
先生のあんな顔見たくなかったな。
どうしたんだろ・・・・・
「道施！」
「網野・・・・」
少々めんどくさそうに振り向いた。
ちょっとオープンしすぎたらしく、反省する彼女。
「何？」
これもまた不機嫌そうに問う。

「え、いや・・・・」とたじろんで言葉を詰まらせる。
「用がないなら呼ばないで」
睨みつける。
これもまた怖い。
「いや、別、に」
「あ、そう。あたし帰るから」
と言って網野を通り過ぎ、帰っていった。

■　■

三月――
この季節は毎年心が痛む。
「だって、ほら、離任式」
先生がいなくなる年。
――森先生は新任だし、居なくならないよね。
そう心の中で自己暗示した。
明日は、離任式。

「えっ、先生、離任するんですか！？」
「ん、ああ。ちょっともう一回勉強し直さないとね」
「そんな――」
彼女は、前々から自覚してた。
彼のことが好きだって。
ぎゅう、と自分の手を握りしめる。
「――嘘っていってよ」
「ん？」

「もう、あの授業、受けられないの――・・・・・？」
ボソリとつぶやく。
届いてない。
卒業式に、言いたかった。
――来年まで、待っててよ・・・・・・！！
涙を隠せず、走り出す。
「お、おい！」
もう誰の言葉も今日は耳に入れない。
離任式なんてサボる。
愛理に伝えとこ。　お腹痛いから休むって。
「道施！！」

■　■

三年生になって、十ヶ月。
雪の降る、一月。
森先生が居なくなってからも、しっかり英語の勉強を続けてきた晴子。
今や、学年で十位に軽々と名を残している。
「晴子ぉ、そこまで来たのに何が心残りなわけ？」
「別に。何も言ってないじゃない」
「嘘つかないでよ。顔に書いてある。
あたしはあんたと何年付き合ってると思ってるの？」
「あー、はいはい。愛理様。わかりましたぁ」
「うっざー！！」
はぁ、と嘆息して、窓越しに空を見る。
一月にしては珍しい、晴天。

「あたしの心は未だに大雨だよ・・・・」

そして迎えた卒業式。
憂鬱も続くまま、卒業した。
晴子は、みんなが帰り、寂しくなった校舎を一人で後にした。
校門を過ぎようとしたとき。
ふと。
見覚えのある後ろ姿。
「森、先生？」
森先生は、結構の間待っていたのか、耳や鼻が真っ赤だった。
「――――道施」
「何してるんですか、ほかの生徒行ってからもう、三十分も――」

あたしが言い終える前に、先生は何も言わず、
抱きしめてくれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ごめん。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「ただいま。」
それだけ言って、先生はあたしを放した。
「勉強、終わったよ。それと、気づいた。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺は、お前が好きだって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ッッ！！！」
「あと、網野が言ってた「俺、お前のこと好きだった」って伝えろって」
「・・・・・・・・・・・・・・・」
去年のあれは、告白の前触れだったのか、と気づく。

「先生」
「ん？」
「あたしも先生のこと好きです」

（後書き）

僕の小説の鉄則として、
「w」やネット用語は入れません。
なんか、気持ち悪いし。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5498s/

英語。

2011年10月3日11時20分発行